

秋田県文化財調査報告書232集

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書 XIII

—新町遺跡—

1993・3

秋田県教育委員会

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅺ

しんまち
—新町遺跡—

1993・3

秋田県教育委員会

序

東北横断自動車道秋田線は、秋田県の高速交通体系の根幹となるものです。すでに秋田市から横手市までの57.4kmは、平成3年7月に開通し供用されており、現在は横手市から岩手県湯田町までの区間15.8kmについての工事が、進められています。

しかし、本区間の路線上には、多くの遺跡の存在することが確認されており、秋田県教育委員会では、平成2年から工事に先立って、遺跡の発掘調査を実施して、記録保存に努めております。

本報告書は、平成2年度に調査しました横手市新町遺跡の調査成果をまとめたものであります。

本書が、埋蔵文化財の保護に広く活用され、郷土の歴史や文化を研究する資料として、多くの方々に御利用いただければ幸に存じます。

最後に、本調査の実施及び本書の刊行に際し、御協力を賜りました日本道路公団仙台建設局、横手市、横手市教育委員会をはじめ、関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成5年3月19日

秋田県教育委員会

教育長 橋本 顯信

例　　言

1. 本書は、東北横断自動車道秋田線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の12冊目の報告書である。
2. 本書は、平成2年度に発掘調査された横手市に所在する新町遺跡の調査成果を収めたものである。
3. 調査の内容については、既にその一部が発掘調査報告会などで公表されているが、本報告書の内容がそれらに優先する。
4. 本書の執筆は、大野憲司が行った。
5. 本書に使用した地図は、国土地理院発行の5万分の一、2万5千分の一『横手』地形図である。
6. 遺構土層図中の土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』によった。
7. 掘図中の遺物番号は、遺構内外の出土を問わず、土器・石器毎に通し番号を付してあり、番号は図版中の遺物番号と対応する。

目 次

序

例 言

目 次

挿図目次

図版目次

| | |
|----------------------|----|
| 第1章 はじめに | 1 |
| 第1節 調査に至るまで | 1 |
| 第2節 調査の組織と構成 | 2 |
| 第2章 遺跡の立地と環境 | 4 |
| 第1節 遺跡の位置と立地 | 4 |
| 第2節 歴史的環境 | 4 |
| 第3章 発掘調査の概要 | 9 |
| 第1節 遺跡の概観 | 9 |
| 1 遺跡の立地と推定範囲 | 9 |
| 2 遺跡の現況と層序 | 9 |
| 3 遺構と遺物の分布 | 10 |
| 第2節 調査の方法 | 10 |
| 第3節 調査経過 | 12 |
| 第4章 調査の記録 | 14 |
| 第1節 検出遺構と遺物 | 14 |
| 1 縄文時代の検出遺構と遺物 | 14 |
| 2 時期不明の遺構 | 19 |
| 第2節 遺構外の出土遺物 | 20 |
| 1 土器 | 20 |
| 2 石器 | 25 |
| 第5章 まとめ | 26 |

挿 図 目 次

| | |
|---|----|
| 第1図 新町遺跡の位置 | 3 |
| 第2図 遺跡の位置と路線図 | 5 |
| 第3図 周辺の遺跡 | 7 |
| 第4図 工事計画と調査区 | 8 |
| 第5図 遺跡の基本層序 | 10 |
| 第6図 新町遺跡と周辺の地形 | 11 |
| 第7図 グリッド配置と検出遺構配置図 | 13 |
| 第8図 SKF03・04袋状土坑、SK06・07・08土坑 | 15 |
| 第9図 SK10・11・13・14・15・16土坑、LM50P1、柱穴様ピット | 21 |
| 第10図 遺構内出土遺物 | 22 |
| 第11図 遺構外出土土器 | 23 |
| 第12図 遺構外出土石器 | 24 |

図 版 目 次

| | |
|------|---|
| 図版 1 | 1. 新町遺跡遠景（東▷） 2. 新町遺跡調査区遠景（東▷） |
| 図版 2 | 1. 調査区全景（西▷） 2. B区全景（南西▷） |
| 図版 3 | 1. SKF03・04袋状土坑、SK06～08土坑 検出状況（西▷） 2. SKF03袋状土坑 土器出土状況（北▷） 3. SKF04袋状土坑 土層断面状況（西▷） |
| 図版 4 | 1. SKF03袋状土坑 完掘（南▷） 2. SKF04袋状土坑 完掘・土器出土状況（東▷） 3. SK08土坑 完掘・土器出土状況（東▷） 4. SK10土坑 完掘（南東▷） 5. LM50グリッドP1柱穴 断面（西▷） 6. SK16土坑 完掘（北▷） 7. SK15土坑 上層断面（西▷） 8. SK11土坑 土層断面（西▷） |
| 図版 5 | 遺構内出土遺物・遺構外出土遺物（1） |
| 図版 6 | 遺構外出土遺物（2） |

第1章 はじめに

第1節 調査に至るまで

東北横断自動車道秋田線は、首都圏への時間短縮と県内の陸上交通体系の改善など、地域の生産活動と住民生活に必要な情報や資源の交流を促進することを目的に計画された高速道路である。道路は、東北自動車道から岩手県北上市で分岐し、横手市・大曲市を経て秋田市に至る総延長108kmに達する。このうち、秋田一横手間57.4kmについては、昭和53年11月の第8次施行命令によって具体化し、既に平成3年7月に供用が開始されている。

秋田一横手間の道路計画路線内に存在する埋蔵文化財包蔵地の扱いについては、昭和60年4月に日本道路公団と秋田県教育委員会との間で協議した結果、計画路線の変更が無理であることなどから、記録保存の措置を取ることで合意し、昭和60年の河辺郡河辺町七曲地区に所在する6遺跡を皮切りに平成元年度の仙北郡南外村の大畑潜沢Ⅱ遺跡まで、合計27遺跡の発掘調査^(註1)が実施され、それぞれに報告書が刊行されている。

横手インター・チェンジ（I・C）以東の横手一湯田間19.7kmについては昭和61年3月に第9次施行命令が下された。これに伴い昭和62年3月には、日本道路公団仙台建設局長から秋田県教育委員会教育長あてに、道路計画路線内に所在する埋蔵文化財包蔵地の分布調査の依頼があった。これを受けて秋田県教育委員会では、昭和62年5月と同63年6月に遺跡分布調査を実施し、平鹿郡山内村の計画路線内に11遺跡が存在することを報告した。また、横手I・C以東の横手市分についての分布調査は、横手一秋田間の分布調査と同時に、昭和56年と同58年に実施され、4遺跡の存在することが報告されていた。これら計画路線上に存在する合計15遺跡の取り扱いについては、昭和60年の日本道路公団と秋田県教育委員会の合意を踏襲することとした。15遺跡は横手I・Cから北上市側に、柳田Ⅰ・柳田Ⅱ・小松原・新町遺跡（以上、横手市）、茂竹沢・小田Ⅲ・小田Ⅱ・小田Ⅰ・虫内Ⅱ・虫内Ⅰ・岩瀬・中島・相野ヶ・上谷地・越上遺跡（以上、山内村）である。

発掘調査に先立って、横手市分として昭和62年には柳田Ⅰ・柳田Ⅱ遺跡、平成元年には小松原遺跡西半部、平成2年には小松原遺跡東半部と新町遺跡南半部、平成3年には新町遺跡北半部の範囲確認調査を実施した。その結果、柳田Ⅰ・柳田Ⅱ・小松原遺跡については遺跡の範囲が計画路線に及んでおらず、また新町遺跡北半部については宅地造成などによる擾乱が著しく^(註2)追構等が遺存していないため、これらは発掘調査の必要がないと判断した。

山内村分の遺跡範囲確認調査は、平成2年に虫内Ⅰ遺跡、平成3年に茂竹沢・虫内Ⅱ・岩瀬

・中島・力石Ⅱ・越上遺跡、平成4年に小田V・小田Ⅳ・虫内Ⅲ・相野々・上谷地遺跡について実施した。その結果、中島・相野々・力石Ⅱ遺跡については遺跡の範囲が計画路線内には及ばないことから調査が不要となった。なお平成2年に、虫内Ⅰ遺跡の南東側と虫内Ⅱ遺跡の西側、及び上谷地遺跡の東側で縄文時代の遺物が採集され、この3つの地点にも遺跡の存在することが判明したことから、各々を虫内Ⅲ遺跡・小田Ⅳ遺跡・力石Ⅱ遺跡として登録し、範囲確認調査を行っている。これらのことから、横断道山内村分の発掘調査対象遺跡は、岩手県側から順に越上・上谷地・岩瀬・虫内Ⅲ・虫内Ⅱ・虫内Ⅰ・小田Ⅳ・小田V・茂竹沢遺跡の9遺跡となったのである。

横手市の1遺跡・山内村の9遺跡に対する発掘調査は、平成2年度の新町遺跡から開始され、平成3年には越上遺跡・岩瀬・虫内Ⅰ遺跡の一部、虫内Ⅱ遺跡・茂竹沢遺跡が、平成4年には上谷地・虫内Ⅲ遺跡・虫内Ⅰ遺跡の一部、小田Ⅳ遺跡が実施されている。

第2節 調査の組織と構成

| | | | |
|--------|---|--|--|
| 所在地 | 秋田県横手市大屋新町字新町36外 | | |
| 調査期間 | 平成2年8月27日～10月18日 | | |
| 調査面積 | 2,230㎡ | | |
| 調査主体者 | 秋田県教育委員会 | | |
| 調査担当者 | 大野 憲司（秋田県埋蔵文化財センター 学芸主事） 佐藤 尚明（〃 非常勤職員） | | |
| 調査総務担当 | 佐田 茂（秋田県埋蔵文化財センター 主査、現：農業科学館） 高橋忠太郎（〃 主事、現：農業科学館） 皆川 清（〃 主査） 佐々木 周（〃 主任） | | |
| 調査協力機関 | 横手市 横手市教育委員会 | | |

註

- 1 秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ～XI』秋田県文化財調査報告書
第150・166・180・186・189・190・191・205・206・207・209集 1986～1991(昭和61～平成3年)
- 2 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第179集
1989(平成元年)
- 3 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第93集
1982(昭和57年)
- 4 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第201集
1990(平成2年)
- 5 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第217集
1991(平成3年)
- 6 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第226集
1992(平成4年)
- 7 前述の小田Ⅰ・小田Ⅱ・小田Ⅲ遺跡については、横断道の分布調査の際に付した遺跡名が、既に別の遺跡として遺跡地図に登録されていたことが判明したこと、地形的には一つの遺跡とするのが妥当であること等から、これをまとめて小田Ⅴ遺跡とした。



第1図 新町遺跡の位置

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の位置と立地

新町遺跡は、秋田県横手市大屋新町字新町に所在する縄文時代の遺跡である。JR奥羽本線柳田駅の北東約0.8km、東北横断自動車道秋田線横手I・Cの東約0.8kmに位置し、調査区中央で北緯約39°16'41"、東経約140°33'43"である。

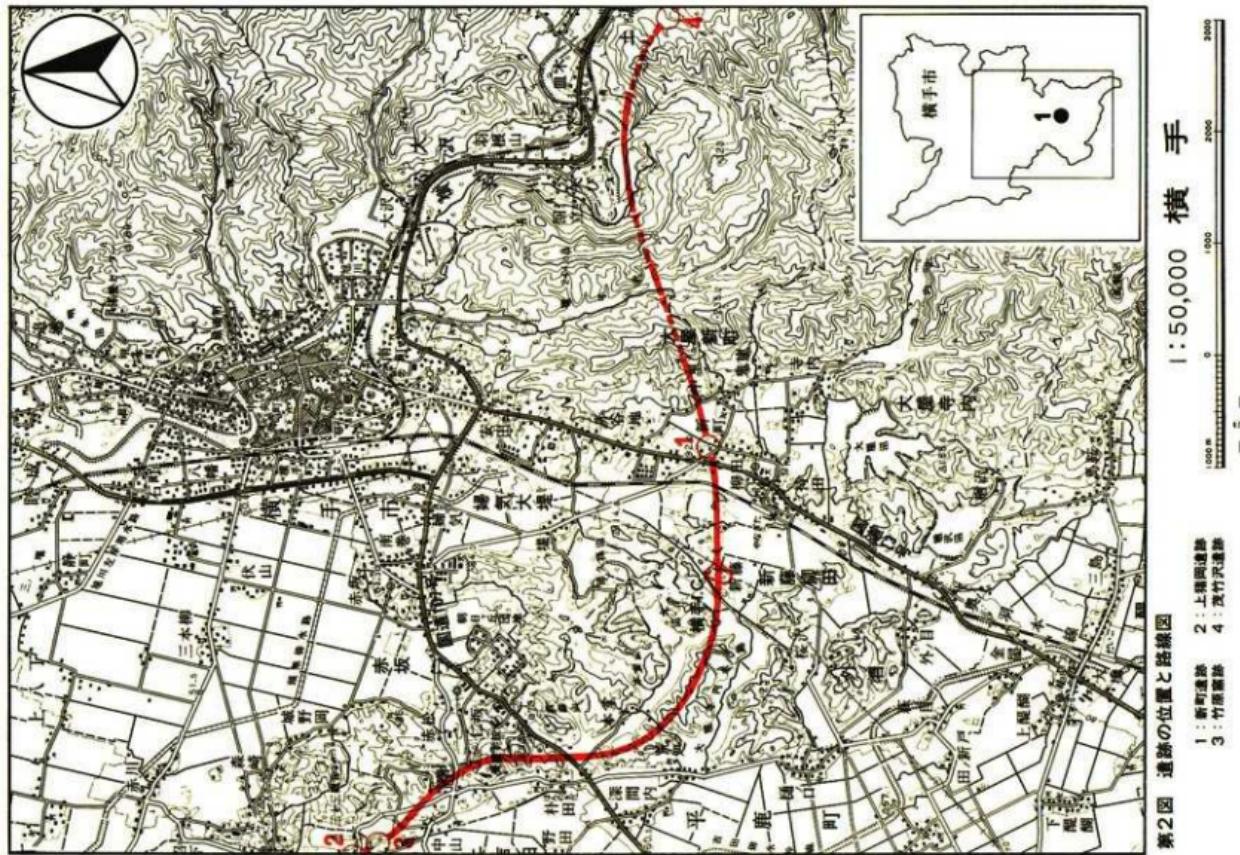
遺跡の位置は、横手盆地中央部東側の金峰山山地の支脈から、沖積地の中へ北西方向に延びる中山丘陵地の付け根部分にあたる。この付近の山麓には極く小規模な水平的複合扇状地が発達しており、遺跡は寺内沢及びその北側の沢によって形成された小扇状地の扇央から扇端部にかけての微高地上に立地している。この小扇状地の特に扇頂～扇央部にかけては略南北方向に連なるいくつかの微細な起伏が見られ、微高地を中心に縄文時代中期～晩期の遺跡が集中している。新町遺跡は、そのような遺跡群の北西側にあたる。

遺跡周辺の地形は、金峰山山地のうちの北側に延びる標高100～250mの山地が遺跡の東側に連なり、南～西側にかけては大屋寺内付近から北西側に標高50～130mの支脈が派生して中山丘陵と呼ばれる緩斜面の多い丘陵地となっている。そして、北側だけは開けており幅500～700mの沖積地が続き、横手市街地西側の広大な沖積地に続いている。この遺跡北側の回廊状の沖積地は平面的には河川の流路に沿うような形を呈しているものの、かつてこの部分が大きな河川の流路となつたことはないようで、このため段丘状の平坦面の発達もほとんど見られない。また遺跡の周辺には、沖積地との比高差が30～50mの小さな残丘が小独立丘状に残っているが、それらの中で、頂部に平坦な面があるものは少なく、斜面はなだらかなものが多い。

第2節 歴史的環境

新町遺跡は、昭和56年に東北横断自動車道秋田線建設事業に係る埋蔵文化財分布調査で発見された縄文時代晩期の遺跡である。

^(註1) 第3図は、新町遺跡の周辺、横手市南端部の東西約3.8km、南北5.3kmの範囲に所在する遺跡の分布図である。この範囲における各時期の遺跡は、旧石器時代から中世城館までのものがあるが、弥生時代と奈良時代の遺跡を欠いており、発掘調査された遺跡も少ない。また、本図幅中には、右上に横手川の河岸段丘が見える以外段丘面ではなく、縄文時代の遺跡は、以下の①～⑥に立地している。①山地上部の平坦部やその突端部、②丘陵頂部のせまい平坦面とその緩斜



第2章 遺跡の立地と環境

面、③小独立丘陵のせまい緩斜面とその直下の沖積地、④沖積地中の微高地、⑤沖積地、⑥河岸段丘上。

旧石器時代の遺跡としては大刺院塚（第3図中の134で、この番号は第1表の遺跡番号と共通する。以下同じ）があり、昭和33年と平成2年にそれぞれ発掘調査が実施されている。^(註2)

図幅中で、縄文時代の遺物は31遺跡で見つかっているが、その遺物の時期が明らかなのは13遺跡で、その中には草創期・早期の遺物は含まれていない。

前期の遺物は、大刺院塚（134）・西ヶ坂（137）の2遺跡で出土しており、両遺跡共に南から北に延びる丘陵突端の台地上に立地する。

中期の遺物は柳堤（139）・堀ノ内（153）・大屋寺内字寺村A（154）・大屋寺内字寺村B（155）で表面採集されている。

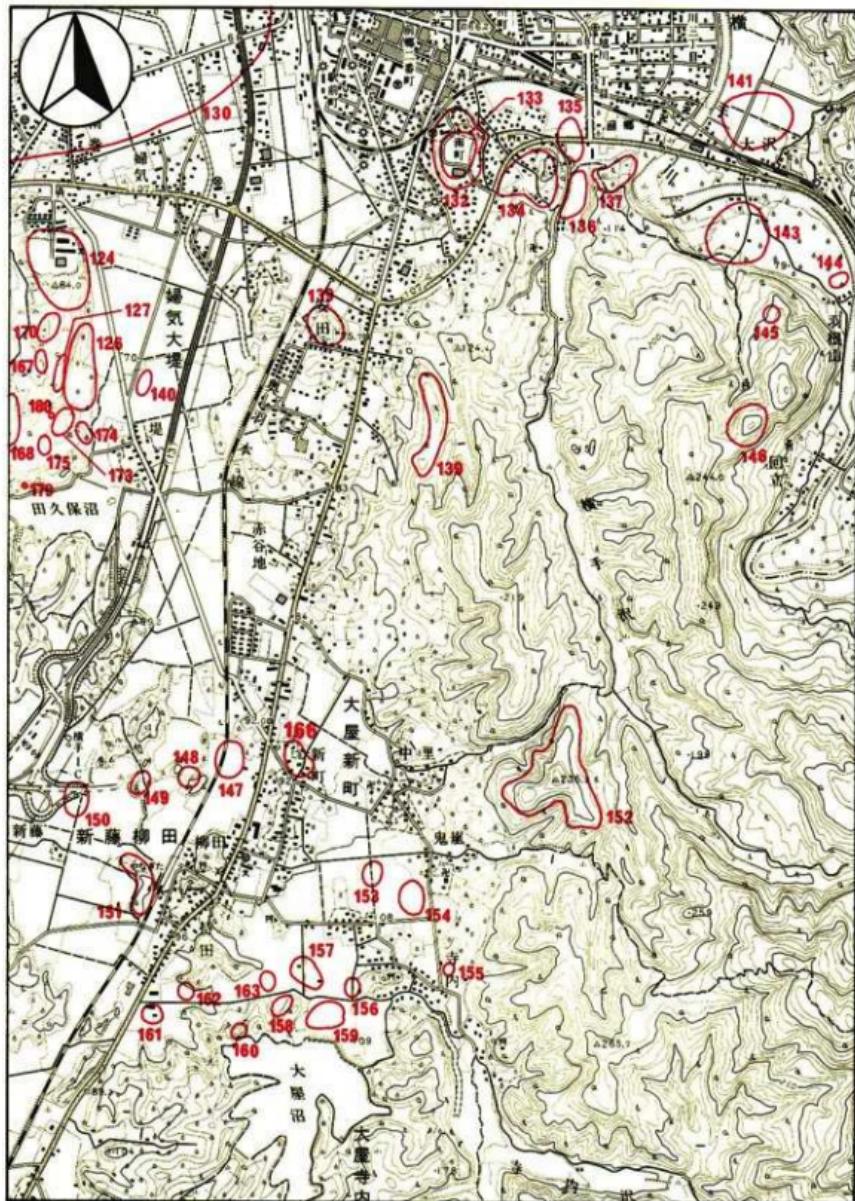
後期の遺物は、郷土館B（126）・柳堤・堀ノ内・大屋寺内字寺村Aで採集されており、郷土館B遺跡で晚期の遺物を伴い、他の3遺跡は中期の遺物を伴っている。

晚期の遺物は、新町遺跡（166）以外に郷土館B・三井寺（135）・下庭当田（143）・寺内（156）・長谷山乙（160）で採取されている。この中で遺物が多く採集されているのが三井寺遺跡で、かなり大規模な遺跡であったと推定されるが、宅地化等によって消滅してしまった可能性が強いという。

周辺遺跡一覧表

| 番号 | 遺跡名 | 時代(時期)・性質 | 番号 | 遺跡名 | 時代(時期)・性質 | 番号 | 遺跡名 | 時代(時期)・性質 |
|-----|--------|------------|-----|---------|-----------|-----|--------|-----------|
| 121 | 堀上断跡 | 不明 | 144 | 豊年 | 縄文 | 169 | 兵谷D | 縄文 |
| 126 | 郷土館B遺跡 | 縄文(奥・熱)・平安 | 145 | 上原断跡 | 縄文 | 180 | 長谷山乙 | 縄文(暖) |
| 127 | 堀上断跡B | 平安(前半) | 146 | 大曾根跡 | 不明(城跡) | 181 | 坂崎A | 縄文 |
| 130 | 赤坂断跡 | 新良時代後期 | 147 | 小曾根 | 縄文 | 182 | 坂崎B | 縄文 |
| 122 | 前畠断跡 | 西晋(366) | 148 | 坂崎I | 縄文 | 183 | 坂崎C | 縄文 |
| 133 | 高町 | 縄文 | 149 | 麻田E | 縄文 | 184 | 高町 | 縄文(暖) |
| 134 | 大刺院塚 | 旧石器・縄文(古) | 150 | 柳堤御子町 | 調査 | 187 | 坂上地D | 縄文・平安 |
| 125 | 寺子 | 縄文(暖) | 151 | 孔坪 | 縄文 | 188 | 坂上地D | 縄文・平安 |
| 126 | 兎山 | 縄文 | 152 | 大曾根跡 | 中世・近世(城跡) | 189 | 坂上地C | 縄文・平安 |
| 137 | 西ヶ坂 | 縄文(前) | 153 | 駒ノ門 | 縄文(中・後) | 193 | 坂上地A断跡 | 縄文・平安 |
| 138 | 宝田断跡 | 平安(城跡) | 154 | 八幡山下寺村A | 縄文(中・後) | 174 | 田久保子 | 縄文・古墳・平安 |
| 159 | 柳堤 | 縄文(中・後)・平安 | 155 | 坂上地2・4村 | 縄文(中) | 175 | 坂ヶ沢羽柴跡 | 平安 |
| 158 | 中里 | 平安・万葉 | 160 | 寺門 | 縄文(中) | 179 | 坂ヶ沢3号塚 | 近世 |
| 141 | 大池不夜山 | 縄文 | 161 | 美林下 | 縄文 | 180 | 坂ヶ沢4号塚 | 近世 |
| 140 | 下把若山 | 縄文(暖) | 162 | 兵谷A | 縄文 | | | |

(第3図に対応する)



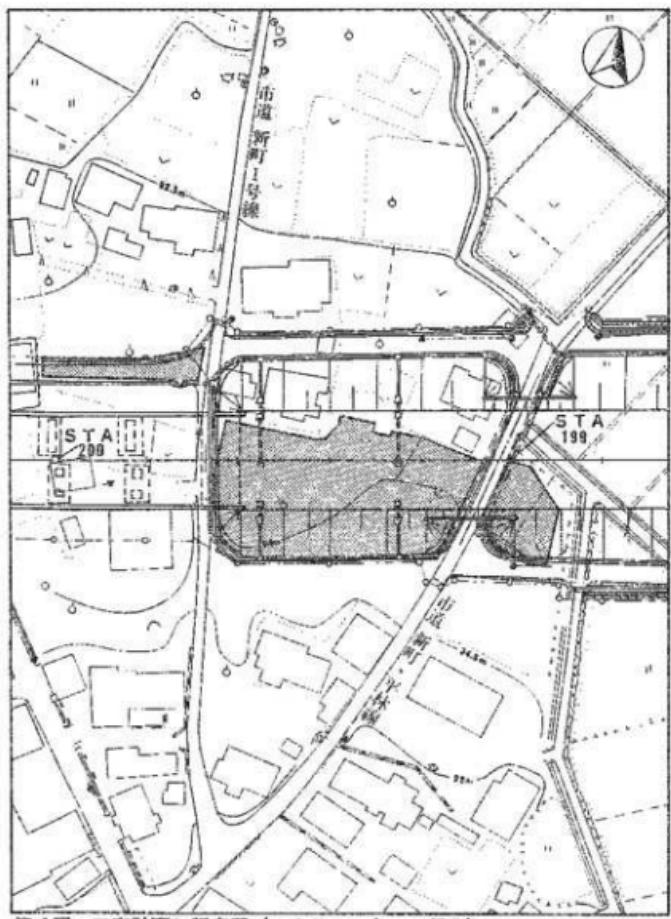
第3図 周辺の遺跡 166: 新町遺跡

1:25,000 横手

註

- 1 第3図は、秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（県南版）』1987（昭和62年）に（遺跡番号166番まで）、その後の横手市の調査と「秋田ふるさと村建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査」の結果を含めた遺跡の分布状況を示したものである（125と129は欠番）。横手市教育委員会『秋田県横手市 遺跡詳細分布調査報告書』横手市文化財調査報告11 1986（昭和61年）。
- 2 しかし昭和33年の発掘調査では、良好な資料は得られなかつたようで、平成2年の調査でも発掘担当者である澤谷敬氏の教示によれば、旧石器時代の明確な遺物は出土せず、前期大木式土器を中心の遺物が出土し、数箇の焼上遺構が検出されているという。

奈良修介、豈島昂『秋田県の考古学』吉川弘文館1967（昭和42年）



第4図 工事計画と調査区（スクリーントーン部分）

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

1 遺跡の立地と推定範囲

新町遺跡は横手市の南東部、寺内沢とその北側にある小支流によって形成された小さな扇状地にある縄文時代晚期の遺跡である。この小扇状地には、南東から北東に流れるいくつかの小さな流路があり、その中の中央を流れる流路西側には、比高差1~1.5mの巣高地が流路に沿う形で分布し、横手市大里新町字新町集落が形成されている。今回の調査区は新町集落の北西端部近くに当たる。新町遺跡は、地形にあまり変化のない沖積地に立地しているため、遺跡の範囲を現況から把握することは困難であるが、調査中の周辺踏査では、今回の調査区外にも第5図の★・▲印で示したところから剥片や縄文土器の細片が採集されていることから、新町遺跡の広がりは今回の調査区から南方約400mの▲印あたりまでの南北400m×東西250mの範囲を想定することも可能で、この場合、今回の調査区は遺跡北西端部に当たると考えられる。

2 遺跡の現況と層序

遺跡の現況は、宅地及び畠地、果樹園などで調査区はリンゴを主とする果樹園であった。調査区内に於ける遺跡の層序は、基本的に地点による大差ではなく、南側ほど各層位が薄く調査区中央部から北東側ほどそれが厚くなる。第5図は、第7図中のA-B、C-D地点における土層断面図である。

第I層は黒褐色(10YR2/2)を呈する表土、耕作土である。小砂利を1~5%ほど含み、かたくしまっている部分としまりのない部分とがある。第II層は赤黒色(10YR1.7/1)で、径0.5~2cmの小砂利を10~20%含み、かたさしまり共に弱い。木炭片を含んでいることもあり、縄文土器や剥片はこの層中の下部から出土することが多い。縄文時代の生活面がこの層中に存在したものと考えられる。第III層は黒褐色(7.5YR3/2)の砂利を主体とする層で、径3~5cmの水磨された扁平な円盤が50~80%を占める。III'層は調査区内に部分的に見られる層で、にぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する粘質土層である。粘性が比較的強くしまっている。第IV層は、褐色(7.5YR4/4)の砂利層で全体的にかたいが崩れ易い。部分的に本層の存在しない部分もある。第V層は明黄褐色(10YR7/6~6/6)の砂質粘土層で、地山と考えられる。粘性は弱いがしまりが良い。このような中にあって、調査区東部・西部は後世の畠作等によって擾乱を受けている部分が多く、基本層位の第II層が既に失われているか極く薄くしか残っていない。なお、第VI層の存在しないSKF03周辺では降雨後など地下水位が上がり土坑内に水が溜まること

が多かった。

3 遺構と遺物の分布

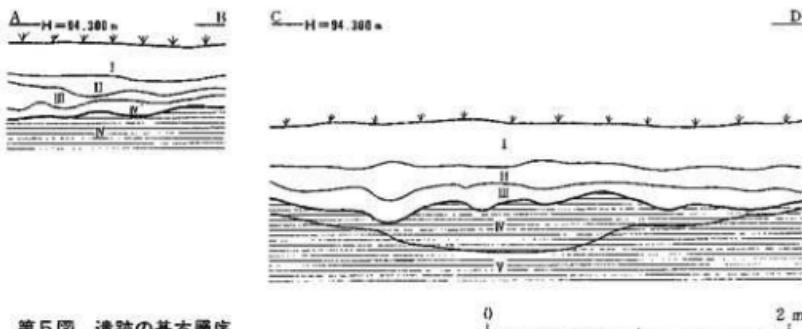
遺跡の立地及び層序から、調査区は縄文時代の生活面となった第Ⅱ層の赤黒色土（いわゆる黒ボク土）が堆積する前に、小流路もしくは小氾濫原となつたことがあり、それが安定して黒ボク土が堆積するようになってから縄文人がその生活の痕跡を残すようになったものと考えられる。縄文時代の遺構と遺物は、調査区全体に散在する傾向にあるが、遺構の主なものはMB45グリッドを中心とする部分、遺物はこの部分と調査区東部に多い。

第2節 調査の方法

発掘調査は 4×4 mのグリッド法によって行った。調査区内にある計画路線の中心杭（S T A199+40）を原点とし、磁北方向を南北基線、これに直交する方向を東西基線とし、4m毎にグリット杭を打設した。原点をMA50とし東から西へIA・IB・IC…MS・MT・NA・NBとアルファベット、南から北へ50・51・52…とアラビア数字を振り当てた。各グリットの名称はアルファベットとアラビア数字の組み合わせにより、4mグリットの南東隅の杭の名称MA50のごとく用いた。

検出した遺構には検出順に、01・02・……と番号を付し、その前にその遺構の略号を付けた。今回の調査で使用した略記号は、溝状遺構=SD、土坑=SK（袋状土坑=SKF）で、柱穴様ビットは検出されたグリッド毎にP1・P2のようにした。

遺構平面図は方眼杭を用いた遠方測量で1/20、もしくは1/10で作成した。発掘作業は表土除



第5図 遺跡の基本層序



第6図 新町隧道と周辺の地形

去を含めて全て人力で行った。調査区の記述に当たっては、東西に細長い調査区の名称を以下のようにした。東西約110m、南北約35mの今回の調査区内には調査区を東西に分断して2本の市道が走っており、これによって分けられた調査区を東側からA区・B区・C区とした。

第3節 調査経過

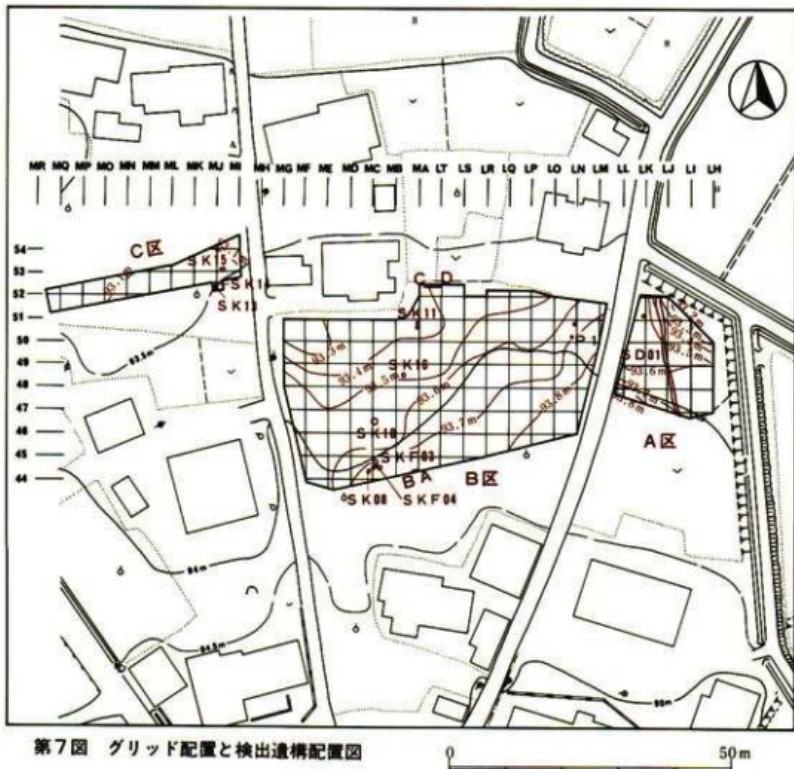
発掘調査は平成2年8月27日（月）から開始した。同日中にプレハブの設置、発掘機材の搬入を行い、翌28日には、調査区東側（A区）から表土除去を開始した。A区は、第2次大戦後間もなくまで宅地のあったところで現在は畠地である。このため、A区東端部はその東側にある流路側に向かって下降しており、そこにはゴミ捨て場となっているところや、盛土された部分などがある。また、A区は全体的に地山土までがうすく、畠の耕作土が地山上部にまで達している。8月31日までに時期不明の溝状遺構（S D01）1条や数個の柱穴様ビットを検出したが、出土した遺物は縄文土器と剥片が数点にすぎない。

調査区全体の中央部に当るB区の表土除去は一部A区に併行して行っていたが、本格的には9月3日北東部から開始した。B区はリンゴ畠であったところである。同日にLD50グリットで直径約1mで断面形が浅い摺鉢状を呈する土壤（SK02）を検出したが、床面近くの埋土中から現代の陶器片が出土したために、遺構としては扱わないこととした。9月6日までにLM・LN50グリットから縄文時代のものと考えられる径20~30cmの柱穴様のビット2~3個を検出したが、周囲も含めて遺物は僅少である。この部分は第Ⅲ~Ⅴ層の砂利層が東側ほど厚く堆積しており、ビットも砂利層を掘り込んだものである。

9月10日からはB区東部の調査と併行してB区南西部の調査にも着手した。この部分（MB44グリット）には、平成元年度の範囲確認調査時に検出した縄文時代の袋状土坑が存在する。同日この袋状土坑をSKF03とし、さらにその南東側1mにSKF03よりも小さい別の袋状土坑を確認したのでこれをSKF04とした。9月13日までにB区中央南部からは風倒木痕が数ヶ所で確認されたが、現代のゴミ捨て場があつたりして搅乱も著しく、縄文時代の遺物は僅く少なく確実な遺構も見えない。なお、9月11日~18日の1週間は雨を混じえた雨の日が多く、B区全域の表土除去を点々と行った。9月19日にはようやく晴れ間を見て、SKF03周辺の遺構検出に努めたところ周辺からSK06~09の小規模な土坑4基を確認した。しかし9月20日には再び強風雨に見舞れ、調査区全体が潮のような状態を呈した。排水しても土坑内には浸透水があふれ出る状態であった。9月25日にはMB46グリットで縄文時代の土坑と考えられるSK10を検出した。10月8日までにB区内で縄文時代の袋状土坑2基、土坑5基、柱穴様ビット2個を検出、精査・実測をして10月9日からはC区の調査に入った。

C区の調査を10月15日まで行ったが、縄文時代の遺物がフレーク1点で東部から時代不明の小さな土坑を3基（SK13・14・15）検出したにすぎない。

10月15日からは、B区の補足的な調査と、基本土層図の作成等を行い、10月18日には機材の撤収を行って新町遺跡の今回の調査を終了した。



第7図 グリッド配置と検出遺構配置図

第4章 調査の記録

第1節 検出遺構と遺物

今回の発掘調査で検出された遺構には、土坑・柱穴様ピット・溝状遺構があり、縄文時代のものとして土坑6基と柱穴様ピット2基、時期不明のものとして土坑5基と溝状遺構1条がある。

1 縄文時代の検出遺構と遺物

埋土中及び周囲から出土した遺物や埋土の状況などから、確実に縄文時代に属すると考えられる遺構は袋状土坑2基と土坑4基、それに2基の柱穴様ピットの計8基である。

これらの遺構は柱穴様ピットを除いて調査区南西部に集中し、柱穴様ピットは調査区中央北東部に存在する。これらの遺構は時期的には全て縄文時代晩期のものと考えられる。

(1) 袋状土坑

坑口部の径よりも、底面もしくは底面やや上部の径が大きい土坑で、断面形が袋のような形を呈する土坑である。2基検出されており、いずれも小規模なものである。

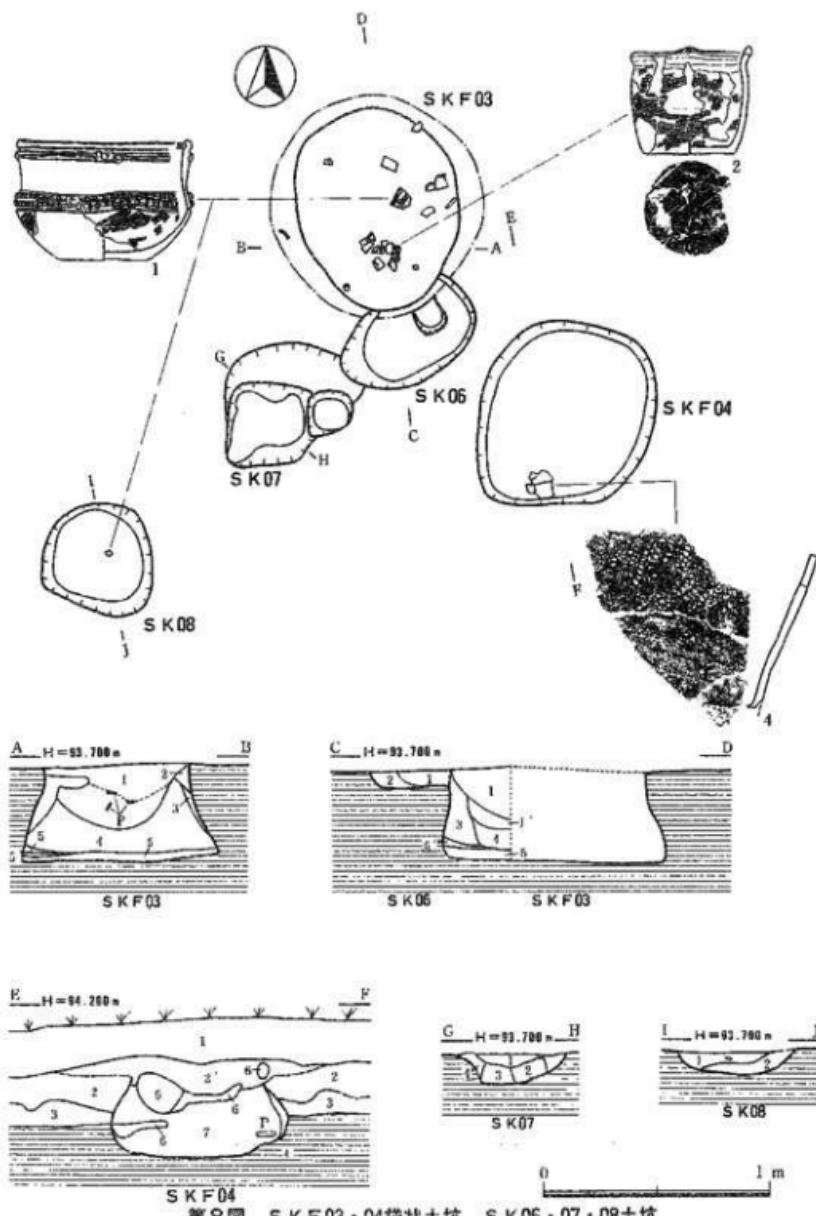
S K F03袋状土坑（第8図、図版3・4・5）

調査区南西部、MB44グリットにある袋状土坑である。この部分MB44・MC44グリットには本袋状土坑の他にSKF04、SK06・07・08が集中しており、その中でも本袋状土坑が、これら土坑群中における位置・規模・出土遺物の点から中心的な存在となっている。本袋状土坑は南側で小さな土坑SK06と重複しており、本袋状土坑が新しい。

本袋状土坑の存在が確認されたのは、平成2年5月に実施した範囲確認調査によってであり、確認面は地山上面である。この時点で黒色土の範囲を半蔵し、約10~15cm掘り下げる段階で縄文時代晩期の土器片（第10図2の破片と3）が出土したので、該期の遺構と認めた。

規模・平面形は、確認面で長径90cm×短径70cmのずんぐりした楕円形（長軸方向は南-北）で、底面が直径95~100cmの円形を呈する。確認面からの深さは44cmであるが、SKF04の例からすると本袋状土坑は、縄文時代晩期の生活面が存在すると推定される基本層位第II層の黒褐色土中から掘り込まれていると思われる。第8図の断面図は既に坑口部が失われている圖であり、本来の深さは60~70cmであったと推定される。底面は平坦でよくしまっており、壁面は明瞭でしっかりしている。

埋土は、5層が黒褐色（5YR2/1）土を主体にしておりこれに地山土粒子・径5~10mmの小ブロックが混入し、断面図左下にはボソボソした地山土が面をなして入っている。全体に比較的



第8図 SKF03・04袋状土坑 SKF06・07・08土坑

かたくしまっており、特に上面は平坦でかたくしまっている。4層は赤黒色（2.5YR2/1）土に地山土粒子を2%前後含む層で、ややかたくしまっている。この層の中央部には、直径約30cm厚さ10cmにわたって炭化物（クリの実を含む木炭片）や一部火熱を受けた感じの地山粘質土の集中する部分がある。この部分や本層全体から第10図1の土器片が散発的に出土した。本層は、5層や1'層と共に人為的に埋められた層である。3層と2層は黒褐色（5YR2/1）～にぶい黄橙色（10YR6/4）土でしり、かたさ共に中位で、壁面の崩落土と思われる。1'層と1層は赤黒色（2.5YR2/1）の土で、分層はむづかしいが1'層の上部を中心に木炭片をわずかに含み地山土粒子も1層よりも多いことからこのように分けた。1'層の上部から第10図2の土器が1ヶ所にバラバラの状態で出土した。1層は、いわゆる黒ボク土に近い土で、木炭片をわずかに含む以外は地山土粒子もほとんど見えない。しまりと堅さは中位で、2・3層と共に自然堆積土と考えられる。

本土坑埋土中からは、小型鉢形土器が2個（第10図1・2）と深鉢形土器の小破片（3）が出土している。

1は、本土坑中に人為的に投棄されたと考えられる第4層中から、小さな破片で坑内全域に散らばる形で出土した。口径11.5cm、底径6cm、高さ8cmの鉢形土器である。口径に比べて底部がやや小さく、これから丸みをもつ胴部・直線的に立ち上がる口頸部へと続く。口縁端部は丸みをもってわずかに肥厚し平口縁で、頸部下端から胴部上半が薄い作りとなつておらず、断面形が緩いS字状を呈する。文様は口縁部と胴部上半にある。平滑になだられた口頸部の口縁部外面には2条、内面には1条の沈線が巡り、外面下段の沈線上には器周4カ所に2個1対の粘土瘤が付される。2個の粘土瘤の間は接着除かれている。胴部上端には2本の隆帯、隆帯間とその下に各1条の沈線が巡る。隆帯上には横位の刻みが4～5mm間隔で施されている。胴部には、緩い傾きのLR繩文が施されている。また、この鉢形土器の内外面には漆が付着しており、特に内面全面と口縁部外面が厚い。付着している漆の色は極暗褐色で、表面に細かい皺が多いことから、この鉢形土器は漆を入れる容器もしくは漆精製容器として用いられたものと考えられる。なお、後述するように、この土器の破片の1片はSK08土坑埋土中からも出土しており、それが接合した。

2は、1'層上面の窪み部分から、割れて一塊になった状態で出土した。口径8cm、底径6cm、高さ6.7cmのコップ状を呈する鉢形土器である。平板的な底部から、胴部が若干丸みをもちながらもほぼ直線的に立ち上がり、わずかに外反する短い口縁部に至る。口縁の1カ所に低いA突起があり、突起中央部には極く浅い刺突が一つだけ付されている。口縁部は、横位のなで調整により無文で、胴部にはLR繩文が一部不定方向部分を含む横位に施されている。底部外面には筆の葉と思われる圧痕がかすかに残っている。全体の色調は内外面共に黒～灰褐色で、

胎土には細かい砂粒が15%前後含まれ、断面には微細な気泡状の小孔が見える。また、器外表面胴部下半には黒色の漆状の付着物が幅1cm内外に薄く付着している。

3は、範囲確認調査時のNo.3トレーニングの土坑1（今調査のSKF03）の埋土中（上部）から出土した深鉢形土器の胴部下半の破片である。胎土・色調・焼成等の比較から、後述するSKF04出土の深鉢形土器（第10図4）と同一個体のものと考えられる（接合はしない）。

SKF04袋状土坑（第8図、図版3・4・5）

SKF03と同様、調査区南西部MB44グリッドにある袋状土坑である。SKF03から南東にわずか50cmの所に位置し、SKF03検出面の精査及びその周辺の遺構精査中に検出した。SKF03の東側に設定したセクションベルトが本袋状土坑のほぼ中心を南北に切る形になっており、地山上面での確認時には略円形の浅い土坑と思われたが、土層断面の観察から袋状土坑と確認したものである。この土層断面の状況では、本袋状土坑は縄文時代晩期の生活面が存在すると考えられる基本層位の第II層中から掘りこまれている。規模及び平面形は、坑中位下半で直径80cm、坑底部で直径70cmの不整円形を呈する。坑口部はセクションベルトでは把握出来たものの、面的には確認出来なかった。セクションベルトから推測される坑口部の直径は60cmで、土坑全体の断面形状は、坑口部よりも坑中位下半が膨らむ袋状を呈する。坑口部からの深さは35cmで、地山上面からは15cmである。底面及び壁面はなめらかでしっかりしている。

埋土は、いずれも赤黒色（2.5YR2/1）を呈し、7層がやや堅くしまって底面近くに地山土粒子がシモリ状に含まれているのに対し、6層は地山土粒子が全体に30~40%含まれて堅くしまっている部分と軟らかい部分とが混在している。5層は、7層と同色の土がブロック状に堅くしまっている部分である。底部近くの南端部から、第10図4の深鉢形土器の底部から胴部にかけての破片が斜めになって出土している。

第10図4は、底部から少し外傾して立ち上がる深鉢形土器下半の破片である。胴部には太くて粗いLR縄文が施されているが、施文が非常に浅く、底部から約5cmの高さまでは縄文が見えない。胎土には径3~5mmの砂粒を含み、砂粒が器外表面に露出している。4個の破片が接合しているが、割口の一部には煤状炭化物が付着しており、容器として使用中に既にヒビ割れのあったことが分かる。また、煤状炭化物は内面の底部から5~6cm上にも付着している。この土器は、薄手の作りであるものの、縄文時代晩期のものと考えられる。

SKF06土坑（第8図、図版3）

SKF03南端部と重複している小さな土坑で、SKF03同様地山上面で確認された。土層観察では、本土坑がSKF03袋状土坑に切られている。長径60cm×短径40cmの橿円形を呈し、確認面からの深さは8cmと浅い。埋土は、1層がSKF03の1層と同色であるが、SKF03の1層よりも木炭片が少ないと分層した。2層は黒褐色（7.4YR2/2）土で地山土粒子を約30

%ほどシモフリ状に含んでやや堅い。埋土中から遺物は出土しなかった。

S K07土坑（第8図、図版3）

S K F03周辺の精査時に地山上面で土の汚れ部分があり、これをS K07としたものである。造構のプランとして上面および底面ともに明瞭ではないが、上面径約50cmの不整橢円形を呈し、底面南西部に最深部があり、断面形状は形のくずれた鍋底状を呈する。地山は、1層がS K F03・S K06・08等と同様の黒褐色土であるが、他は地山土とそれほど違わない明黄褐色土などである。埋土全体は、締まり堅さ共に中位～やや強である。

埋土中から遺物は出土していない。

S K08土坑（第8図、図版3）

S K F03の南西1.3mにある直徑約50cmの不整円形を呈する小さな土坑である。S K06・07などと同様、S K F03の周囲を精査中に地山土上面で確認したものである。底径は約40cm、深さは確認面から10cmと浅く、断面形状はフライパン状を呈する。埋土は、1・2層共に赤黒色土（2.5YR2/1）で両者ともに地山土粒子を若干含み、やや堅く締まっている。

埋土の中央中位から縄文時代晩期の土器小破片が1点出土した。この小破片の内外面には漆が付着しており、後の接合作業の結果、S K F03の埋土下部から出土した鉢形土器（第10図1）の口縁部であることが判明した。このことにより、本土坑が埋まった（埋められた）時期はS K F03と同時であると考えられる。

なお、S K F03周辺の造構群は、本土坑を含め、S K06・07及びS K F04に関しても、これらは全てS K F03を中心にするかのように分布していること、埋土がほぼ同様であること、S K F03とS K08、及びS K F03とS K F04からはそれぞれ同一個体の土器が出土していること等から、ほぼ同時期に構築された造構群であると考えられる。また、S K06・07・08のプランは、土坑というよりも柱穴様のピットとも考えられるが、底面の状況から柱穴とするには疑問が多く、一応ここでは小規模な土坑とする。

S K10土坑（第9図、図版4）

調査区南西中央近く、MB46グリッドの地山上面で確認された。S K F03・04、S K06～08土坑群の北側6～7mに位置する。平面形は、直徑100cmの円形を呈し、確認面からの深さ25cmであるが、確認面よりも底面が若干ながら広がっている部分もあり、本来袋状を呈していた可能性もある。

埋土は4層に分けることが可能で、1層は基本層位の第Ⅱ層と同じであり自然堆積と考えられる。2層は黒褐色（5YR2/1）土で、堅く締まつたブロック状の部分が多く、ブロック間は比較的間隙があつてボソボソしている。3・4層と共に人為的に埋められたものと考えられる。2'層は木の根による搅乱か地山土粒子が多い。3層は赤黒（2.5YR2/1）～黒褐色（5YR2/1）

土に地山土粒子が10%前後含まれており、粘性が少しあり、強く締まっている部分と軟らかい部分とがある。4層は地山土を主体とする中に20~40%の割合で黒褐色土が混じっている。底面は、平坦で比較的よく締まっている。

埋土中から遺物は出土していないが、埋土の状況はSKF04などに類似しており、それらと同じ縄文時代晚期の土坑と考えられる。

(2) 柱穴様ピット

調査区北東部から、縄文時代の柱穴様ピット2基(P1・P2)が検出されている。P1・P2はLM・LN50グリッドにあり、いずれもこの付近に分布する砂利層の上面で確認された。P1(第9図、図版4)は長径70cm×短径55cmの円形に近い橢円形を呈し、深さは30cmである。本柱穴様ピットは、耕作土直下の砂礫を30~50%含む黒褐色土層(第2層)と、その下の暗褐色を呈する砂利層(第5層)を掘り込んでおり、この部分では基本層位の第Ⅲ層は、耕作によって既に失われているものと判断された。埋土は赤黒色を呈する土で、小砂利を20%前後含み間隙があるものの比較的締まりがよい。柱アタリは確認できなかった。埋土中位と底面近くから各1点づつ土器片が出土している(第10図5)。P2は1辺が40~50cmの隅丸方形で、確認面からの深さは20cmである。埋土中から遺物は出土していないが、埋土の状況などがP1に似ているところから、P1と同時期の遺構と考えられる。

第10図5は、小型鉢形土器の胴部破片と考えられる。無文で、胎土には0.3~2mmの砂粒を含み、色調は暗赤褐~褐色を呈する。

2 時期不明の遺構

埋土中からその遺構の時期を特定できるような遺物が出土していない土坑が5基と、溝状遺構が1条検出されている。このうち、溝状遺構はその埋土などから現代のものと考えられるが、5基の土坑については、埋土の状況などから縄文時代の可能性もある。

SK16土坑(第9図、図版4)

調査区中央部MA48グリッド地山上面で確認された。直径80cmの円形を呈する土坑で、深さは25cmである。埋土は、1層が赤黒色(2.5YR1.7/1)を呈し径5mm前後の小砂利を10~15%含むのに対し、北側に分布する2層は同じ色調ながら径1~2cmの小礫を5%前後含んでいる。底面から一部生焼けの木片が出土した以外は遺物は出土していない。

SK13・14・15(第9図)

調査区北西部でまとめて検出された土坑である。この周辺は地山が砂礫層で、この砂礫層上面で遺構プランを確認した。

SK15は、長径80cm×短径60cmの略円形を呈し、深さは25cmである。埋土は赤黒色(7.5YR1.7/1)土と砂利の混土で、砂利が50~60%を占め間隙が多い。

SK13とSK14は一部で重複するものの（SK13が14に切られている）、埋土や形状からほぼ同時期に構築された土坑であると思われる。SK13の平面プランは、径60cmの円形で、中華鍋様の形状を呈し、最深部で10cmである。底面は砂利層のため、若干の凹凸がある。埋土はSK15と同様である。

SK14は、径80cmの円形を呈し、形状・埋土共にSK13とほぼ同様である。深さは最深部で18cmである。

3基いずれからも遺物は出土していない。

SK11（第9図、図版4）

調査区中央北部LT50グリッドの地山上面で検出された柱穴様の土坑である。平面形は直径60cmの円形を呈し、深さは60cmである。ほぼ垂直に掘られているが柱アタリの痕跡は見えなかつた。埋土は1～4層に分けられるが、1・3層は赤黒色（7.5YR1.7/1）を呈する粒子の細かい土で、1層が小砂利を3%前後含んでいる。堅さはやや弱～普通である。2層は木の根のカクラン。4層は赤黒色土に粘性のある地山土ブロックと砂利を含んで堅く締まっている。遺物は出土していない。

SD01溝跡（第7図）

A区中央部をほぼ南北に継断する形で、耕作土除去後の地山面から検出された溝跡である。検出部分の長さ約20m、幅0.4～0.7m、深さ0.1～0.4mで、北側に行くにつれて深くなっている。本遺構は、A区北東端部に分布する昭和に入ってからの整地層の一部を切っていることから、現代の溝跡であることが判明した。埋土中から遺物は出土していない。なお、A区にはこの他に、直径30cm前後の柱穴様ピットが点在しているが、埋土の状況から、これらも現代のものである。

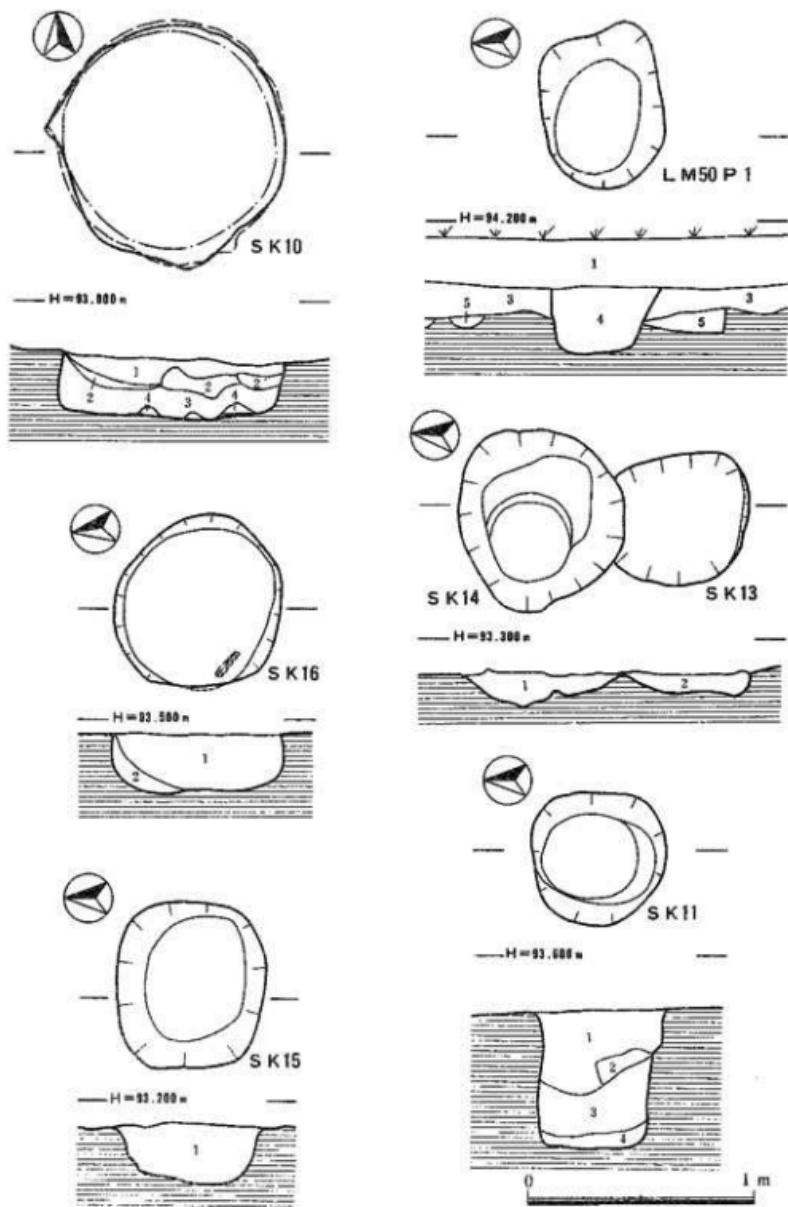
第2節 遺構外の出土遺物

遺構外の遺物として、縄文時代の土器と石器（剥片を含む）が、土器はB区東半とSKF03を中心とするB区南西部にやや集中して、剥片はA区とB区北東部にやや集中して出土している。

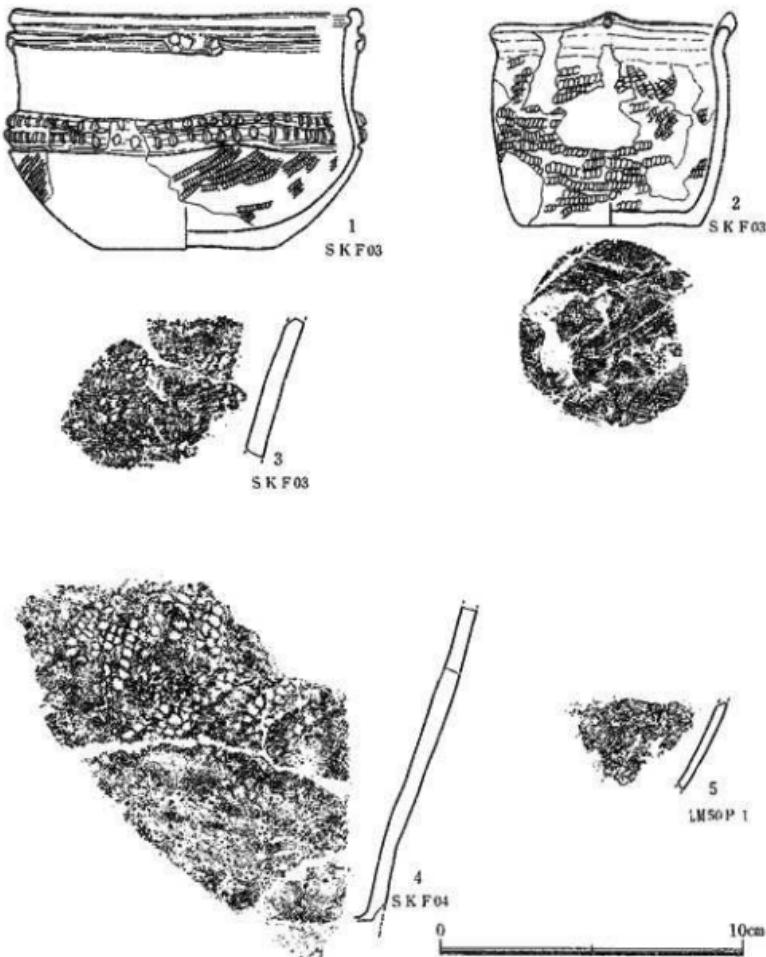
1 土器（第11図5～17、図版5・6）

遺構外から出土した土器は、平成2年度の範囲確認調査で出土したものも含めて20点である（接合したものについては、接合後を1点とした）。全て、縄文時代晩期のものと見られる。

第11図6は、平底から内湾気味の胴部を経てやや肥厚する口縁部に至る皿形土器である。推定される口径は22～23cm、高さ5cm前後で、全体の約8分の1の破片である。幅約8mmの口唇

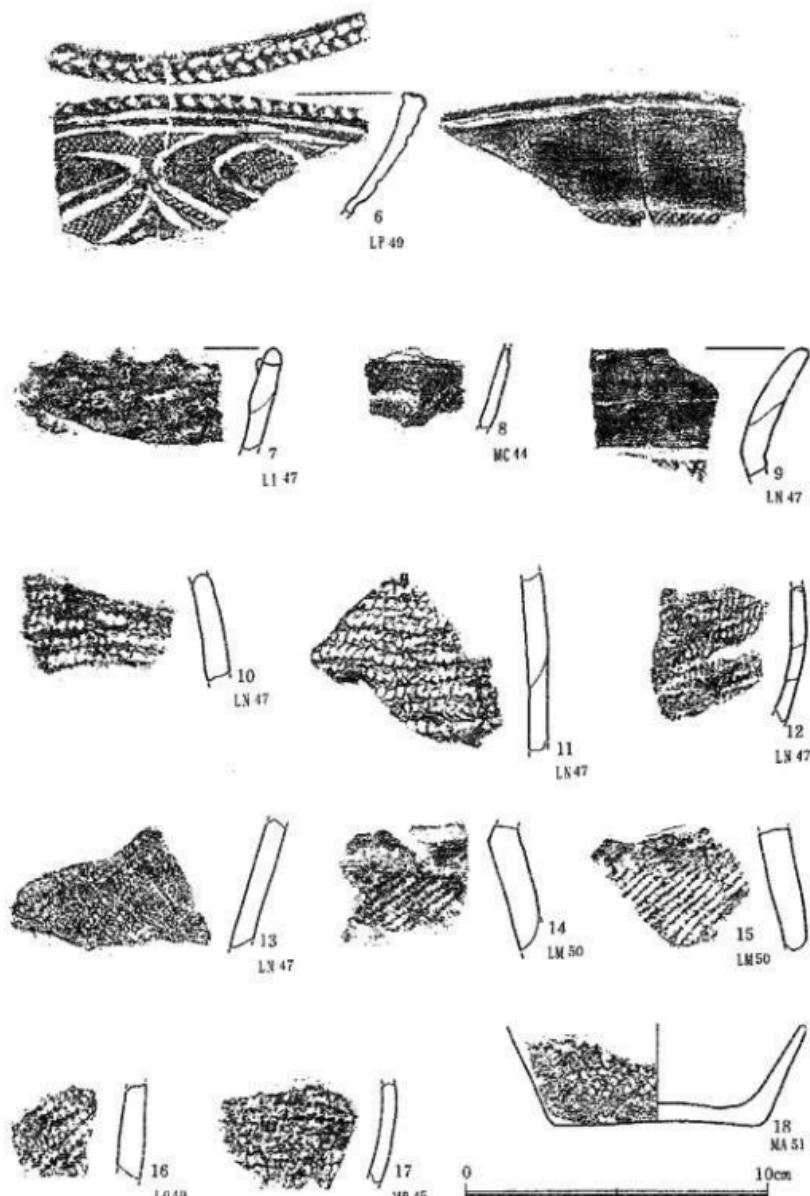


第9図 SK10・11・13・14・15・16土坑 LM50P1柱穴様ピット



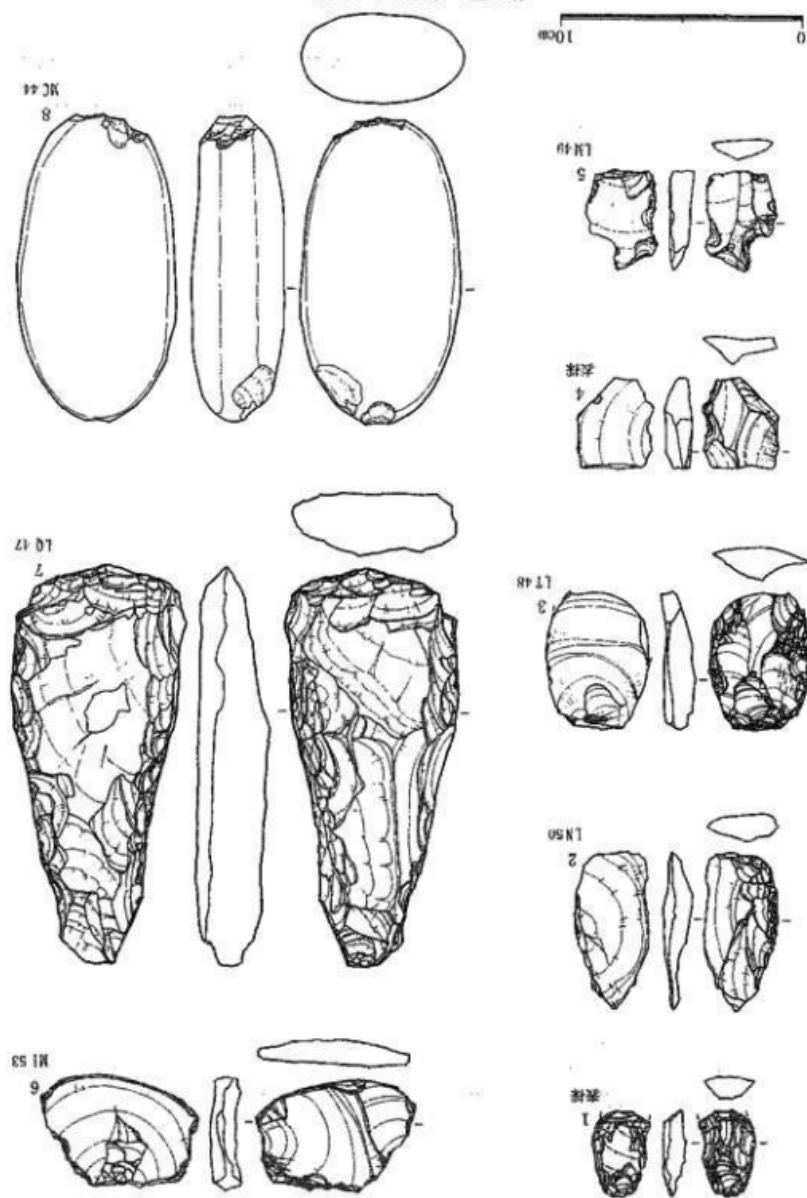
第10図 遺構内出土遺物

部には菱形の割み目列を2条、口縁部には2条の沈線、その下に浅い沈線と充填縄文による雲形文が施されている。また内面には、口縁部に浅い1条の沈線、胴部中位やや下にL R縄文の施された低い隆帯が巡っている。7は、口縁部が外側に屈曲する深鉢形土器の口縁部である。口唇部には指頭によると思われる押圧がやや斜めに施され、小波状口縁を呈する。口縁部は無文であるが、胴部には斜縄文が施されるものと考えられる。外面には、煤状炭化物がわずかに



第11図 遺構外出土土器

第12圖 遺物出土石器



残っている。胎土には径0.3~1mmの砂粒を多く含み(25%程度)、焼成は良好である。8は、小型深鉢形土器の胴部破片で、拓本上端に横走する1条の沈線があり、その下に細密なLR繩文が浅く残っている。9~11は、LM47グリッドから出土した同一個体の破片である。9が口縁部、10が胴部上半、11が胴部中位の破片と見られ、全体としては、頸部で屈曲する口縁部を持つ深鉢形土器と考えられる。口縁部は無文で、頸部に1条の沈線があり、胴部にはやや粗いLR繩文が施されている。内外面にはベンガラと思われる赤色顔料が薄く付着している。胎土に含まれる砂粒は微細で(径0.1~0.3mm)、割れ口の観察では、胎土の色調が青灰色で微細な気泡状の小孔が多く見え、胴部内面には砂粒が横方向に大きく移動したケズリ状の調整痕が歴然としている。13も9~11と同様な深鉢形土器の胴部下半の破片である。胎土と器面の調整痕も似ているが、胴部に痕跡程度に残っている繩文が9~11のもとは異なる。12は9~11よりも小ぶりの深鉢形土器の胴部破片である。14・15は、LM50グリッドのP1周辺から出土した同一個体と考えられる深鉢形土器の頸部~胴部上半の破片である。9~11とほぼ同様の器形と文様構成になるものと思われる。やはり、内面には砂粒の著しい移動痕が残っている。16は深鉢形土器の、17は鉢形土器の胴部破片で、18は鉢形土器の底部である。18の外面は摩滅と剥落が著しく、LR繩文が部分的にしか残っていない。

2 石器(第12図1~8)

調査区内から大小の剥片を含む石器が29点出土しており、その中に定型的な石器や二次的な加工を施したもののが8点ある。剥片は調査区東部に多く、定型的及び二次加工のある石器はA・B両区から散発的に出土した。

第12図1は小型の石箋の基部で、刃部側を欠損している。2は横長剥片の2辺に裏面側から二次加工を施した石器である。打面と反対の縁辺はヒンジで終わっており、二次加工は施されていないが、形態的には石箋状を呈している。3は弱い二次的な火熱によって下方が欠損しているものの、縁辺への二次加工のあり方、全体や断面の形状から、削器もしくは搔器と考えられる。4は、不定形剥片の1辺の2~3カ所に抉りを入れた抉入石器である。5は、刃部先端側を欠く粗い作りの石匙か抉入石器と思われる。6は先端がヒンジで終わる分厚い横長剥片の両側縁と断面部に急斜度の刃部を作出した削器か。7は板状の亜角礫の全縁に二次加工を施した打製石斧で、重さ382gである。8は、円礫の全面を平滑に仕上げた磨石で、長軸両端には敲打痕が残り、敲石としても使用されている。重量は419gである。

第5章 まとめ

新町遺跡は、秋田県南東部に位置する横手市南部の、小扇状地の最高地上に所在する縄文時代晩期の遺跡である。今回の調査は、東北横断自動車道秋田線建設事業に係る埋蔵文化財事前調査として、2,230m²発掘調査された。

調査の結果、縄文時代晩期の袋状土坑2基、土坑4基、柱穴様ピット2基が検出され、該期の土器や石器が出土した。以下、検出された袋状土坑と出土した縄文土器について若干言及し、まとめたい。

〈袋状土坑について〉

今回の新町遺跡で検出された縄文時代の土坑のうち、SKF03・04の2基は、坑口部よりも坑下半部もしくは底部が広い形態を呈しており、形状がいわゆる巾着袋に似ているところから袋状土坑と呼ばれるものである。坑口部よりも坑底部が広い土坑の呼称としては他にフ拉斯コ状土坑（ピット）があるが、新町遺跡の、特にSKF04については、断面形状がいわゆるフ拉斯コ状ではないことから袋状土坑とした。

袋状土坑あるいはフ拉斯コ状土坑の機能については、主に、「貯蔵穴」説、埋葬施設である「土壙墓」説の二つがある。県内の縄文時代晩期の同様な遺構についても、増田町梨ノ木塚遺跡SK219や河町風無台II遺跡SK15・17の(^{註1)}ように坑底部から多量の炭化稟等が出土した(フ拉斯コ状)土坑では貯蔵穴とする見方が強く、これとは別に大館市家ノ後遺跡のように(袋状)土坑が群をなしその内には、①人為的に埋め戻され、②底面や埋土下部にベンガラの検出されたものがある、③坑底部に人為的においたと考えられる完全な土器の出土するものがある、等のことから、①～③のいずれかの特徴をもつ袋状土坑については土壙墓と考えられているものがある。新町遺跡のSKF03については、埋土が上部を除いて人為堆積であるが、その土は焼土や炭化稟を含む捨てられた土であること、ほぼ完全な形に復元できる小形鉢形土器が2個体分出土しているが、1個体は小破片となり坑内ほぼ全域に散在していること、1個体はまとまってはいるものの、割れて破片となつたものをまとめて捨てたという状況で、2個体とも人為的に埋納されたものではなく、人骨やベンガラも検出されていない。またSKF04も、埋土が人為によるものか否か判然とせず、出土している土器も深鉢形土器の胴部下半の一部であり、副葬されたものではない。以上のことから、SKF03・04を積極的に埋葬施設(土壙墓)とはできず、現時点では貯蔵施設としておきたい。しかし、SKF03・04の周囲には形状や埋土の状況からは性格を特定できないが、SKF03・04とは同時に構築された小さな土坑SK06・07・08があり、今仮に、SKF03・04を埋葬施設とした場合、SK06・07・08をこれに係わる

何らかの施設（基礎的な木柱など）と見ることも可能のようにも思われる。

なお、SKF04の場合、たまたまセカシヨンベルトが土坑の中心を通り、土層が現表土から観察できるように設定されたため、その構築面が分かり、全体の断面形が袋状を呈していることも分かったのであるが、これが確認面が地山面であった場合には単なる円形の土坑としか識別できなかつたと思われる。土坑構築面が確認面よりも相當上にあった場合、該期の円形土坑がどのような原形であったかは不明で、地山面で確認された円形土坑の性格等についての判断を不確定なものにする場合のあることが知らされた。

〈出土土器と遺構群の時期について〉

今回の発掘調査で出土した土器の主なものは、第10・11図に示した土器群である。このうち第11図6は、胴部から口縁部が緩やかに内傾しながら外に開く平底の皿形土器である。口唇部に菱形の刻み目列が2条、口縁に1条の沈線、その下に充填繩文（LR繩文）による平滑な雲形文が施され、内面胴部下半にはLR繩文が充填される隆帯を有している。また、同図7及び9～11（9～11は同一個体）は、口縁部が屈曲して外反もしくは外傾する深鉢形土器で、9～11は屈曲部に1条の沈線を有し、7は口唇部に斜位の刻み目をもって小波状口縁となっている。両者共に口縁部は無文で、胴部には緩やかに斜位に走るLR繩文が施されている。

SKF03から出土した2個の鉢形土器のうち、第10図1は丸みをもつ胴部に直線的に立ち上がる口頸部が付く器形で、胴部から口縁部にかけての断面形状は緩いS字状を呈する。文様帶は口縁部と胴部上端にあり、口縁部は器窓4カ所に2個1対の貼瘤をもつ2条の沈線、胴部上端には継位の刻み目をもつ2本の隆帯があり、胴部には緩い傾きのLR繩文が施されている。2は、口径・底径・高さにそれほど差がないコップ状を呈する鉢形土器で、短く外反する口縁部は無文で胴部には緩い斜位もしくは横位にLR繩文が施されている。

以上が、今回新町遺跡から出土した主な土器群である。今これら土器群の諸特徴を県内の諸遺跡出土例と比較してみると、6の皿形土器は、秋田市地方遺跡、五城目町中山遺跡、増田町梨ノ木塚遺跡などの例に類似するが、直線的な雲形文や内面の繩文が充填される隆帯などの特徴はそれらの遺跡には少なく、7、9～11の深鉢形土器は平鹿遺跡の土器群の一部に類似^(註4)がある。またこれらを、該期の土器群が出土している宮城県摺萩遺跡や岩手県安堵屋敷遺跡の土器群と比較してみると、6は摺萩遺跡第M期（大洞C₂旧式）の皿B、7・9～11は同遺跡第V期（大洞C₂旧～A式直前）の深鉢にはほぼ一致しており、1・2は、器形とこれに施される文様モチーフが一致している例は県内外ともに確認できないが、これらは岩手県安堵屋敷遺跡鉢形土器V～VI群や摺萩遺跡第VII期鉢Bとの類似を指摘することができる。従って、これら土器群は、從来の型式編年の中期大洞C₂式ととらえることができる。

以上のことから、今回新町遺跡から出土した土器群は、その数こそ少ないものの、繩文時代

第5章 まとめ

晩期大洞C₂式に帰属する一群と考えることができる。また、このような土器が出土したSK F03を中心とする縄文時代の土坑群もほぼこの時期に属する遺構群とすることができる。

なお、第10図1の鉢形土器の内面全面と外面口縁部には、極暗褐色の漆が厚く付着しており、漆の表面には“チジミジワ”と呼ばれる微細な縞が多数見られる。漆精製の段階（「くろめ」）^{註6)}には、両の手に入るくらいの大きさの容器の中でゆっくりと攪拌する作業が必要といい、この土器はまさに“掌（たなごころ）”の大きさであり、この作業に用いられた容器とことができよう。

註

- 1 秋田県文化財調査報告書第63集『泉ノ木塚遺跡発掘調査報告書』秋田県教育委員会1979
(昭和54年)
- 2 秋田県文化財調査報告書第125集『七曲台遺跡群発掘調査報告書』秋田県教育委員会1985
(昭和60年)
- 3 秋田県文化財調査報告書第229集『曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－家ノ後遺跡－』秋田県教育委員会1992(平成4年)
- 4 宮城県文化財調査報告書第132集『沼沢遺跡』宮城県教育委員会・宮城県土木部水資源開発課1990
(平成2年)
- 5 岩手県埋蔵文化財センター『安堵屋敷遺跡発掘調査報告書－添市川筋河川改良事業関連』
(財) 岩手県埋蔵文化財センター・岩手県土木部
- 6 高橋忠彦氏の教示による。



1. 新町遺跡遠景（東▷）



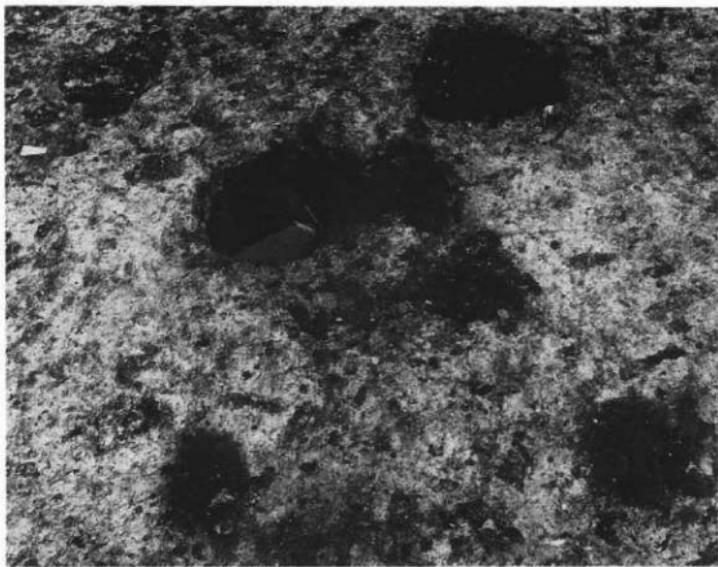
2. 新町遺跡調査区遠景（東▷）



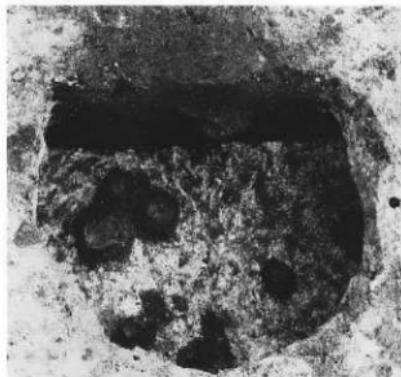
1. 調査区全景（西▷）



2. B区全景（南西▷）



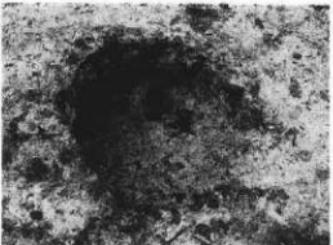
1. S K F 03~04袋状土坑、S K 06~08土坑 檢出狀況 (西▷)



2. S K F 03袋狀土坑 土器出土狀況 (北▷)



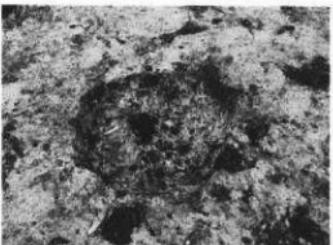
3. S K F 04袋狀土坑 土層斷面狀況 (西▷)



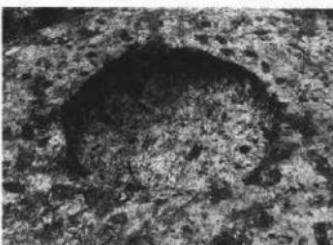
1. SKF03袋状土坑 完掘 (南▷)



2. SKF04袋状土坑 完掘・土器出土状況 (東▷)



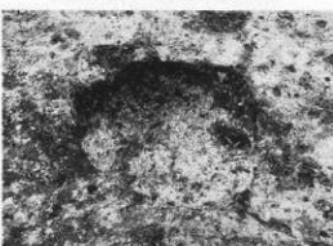
3. SK08土坑 完掘・土器出土状況 (東▷)



4. SK10土坑 完掘 (南東▷)



5. LW50グリッドP 1柱穴 断面 (西▷)



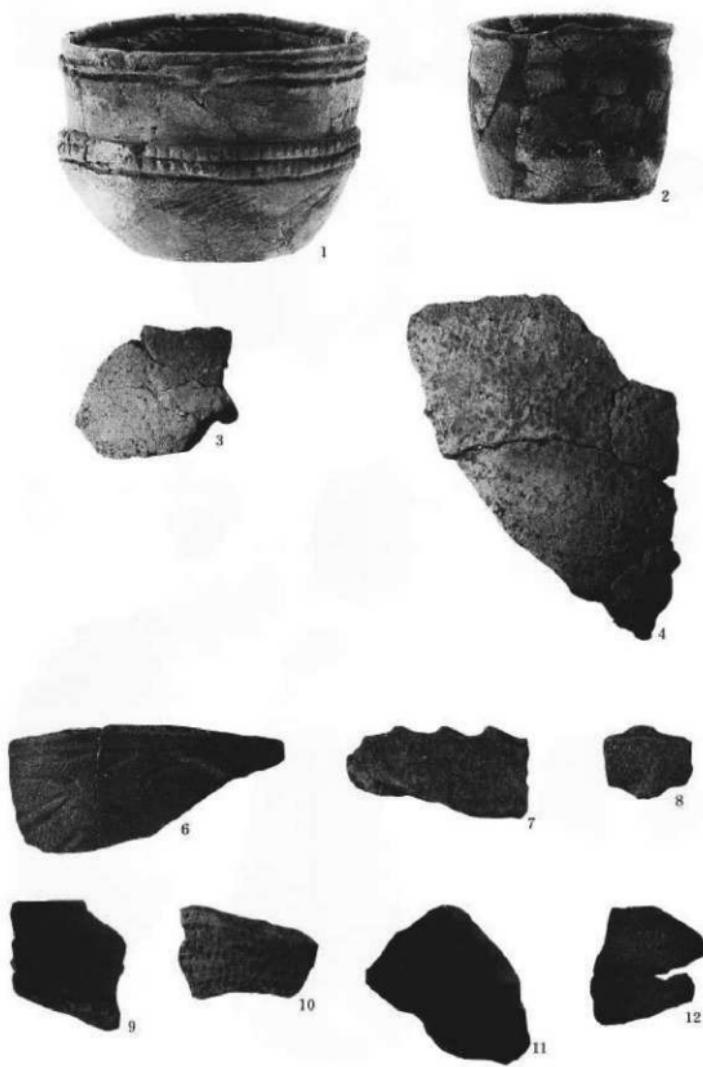
6. SK16土坑 完掘 (北▷)



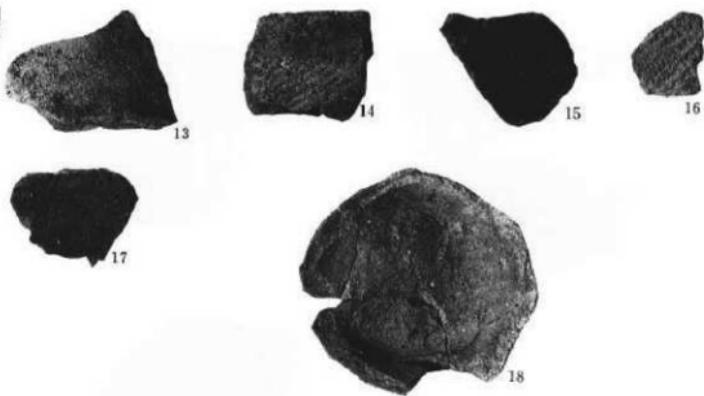
7. SK15土坑 土層断面 (西▷)



8. SK11土坑 土層断面 (西▷)



造構内出土遺物・造構外出土遺物(1)



造構外出土遺物(2)